

労協連だより

時は早くも4月。大学以来の自堕落な生活が祟って、ここ数年は生活習慣病の花粉症に悩まされながらの春先だ。過去最大級の花粉の飛散といわれたが、過去最高級の体質の大改革を断行しなければ、と思わされる。

総会のプレ企画として取り組まれる、4/23(土)の全国地域福祉事業所 推進特別会議は、広島市を舞台に、地域福祉事業所の公的ステイタスを一気に高める契機の間とすべく準備が進んでいる。和光市の他、介護予防のモデル事業で精力的な取り組みを進める、滋賀県・大津市も参加・報告が確定した。地元周辺自治体からの報告は未定であるが、センター事業団の中四国のメンバーが、各地を回って話し込み、労協を伝えながら会議の成功へと機運を高めている。労協内部の会議に、市町村レベルの担当が広島まで来て話してくれる状況をどう捉えるか。和光市では、この4月から指定管理者として高齢者福祉センターと身体障害者デイサービスセンターが始まっているが、大津市にはまだ事業所すらない。

介護予防や自立支援など、新しい介護保険時代に向けて取り組みを進める自治体の中には、いくつか特徴が分かれる。中でも、今回登場していただく自治体などは、「行政主導・丸抱え」から脱却し、自治体の新たな役割の設定と、市民の力・地域の力を高めながら、市民が主体者として制度や活動に関わる流れを意識的に求めているように感じる。それは、介護保険が始まる時に掲げられた理念であり、地方分権の時代に、市民主権を育て

古村伸宏(日本労協連・事務局長)ながら、新しい公共の再構築をしていく流れだ。この実践を進めていくほどに、ワーカーズコープという組織と協同労働という参加・運営理念が必要性と輝きを増す。そのことを会議ではぜひ深めてみたいが、NPOとは違い、「出資による事業体としての最低資金を参加者自ら拠出し参加する」ことは、新しい公共事業の担い手として、またNPOの中でも事業体としての力を備えた存在として、注目を浴びる日がすぐそこに来ているように思う。そしてそれは、「ケア」の質を高める最も有効な働き方が「協同労働」であることを証明しながら、普遍化していくのだろう。

この間若者の職業訓練や、大学発の仕事おこしなどに関わりながら思い当たった。結局この組織は「人と人の関係」をどう豊かに表現し、人に輝きをどう取り戻すのかにかかっていることを。それは現代社会で最も脆弱化している「人と共に生きる」ことを、実感・体感を持って広げることに他ならない。見る・聞く・話す・笑う・怒るなどの感情を伝え合いながら、受け止め合える信頼関係づくりこそが、「協同」の本質的価値であり、その創造過程にこそ、うまく行かないが故の人間らしさが育っていく。向き合っても、声にならない声を聞こうとすることから、若者や子どもの自立を支援する営みは始まる。子を持って今思うことは、底深い「愛」があってこそ、この営みの紆余曲折もまた、自らを成長・発達させているのだと気づく。

春爛漫、人心も開放して、満開の総会へ臨みたい。